

第6章

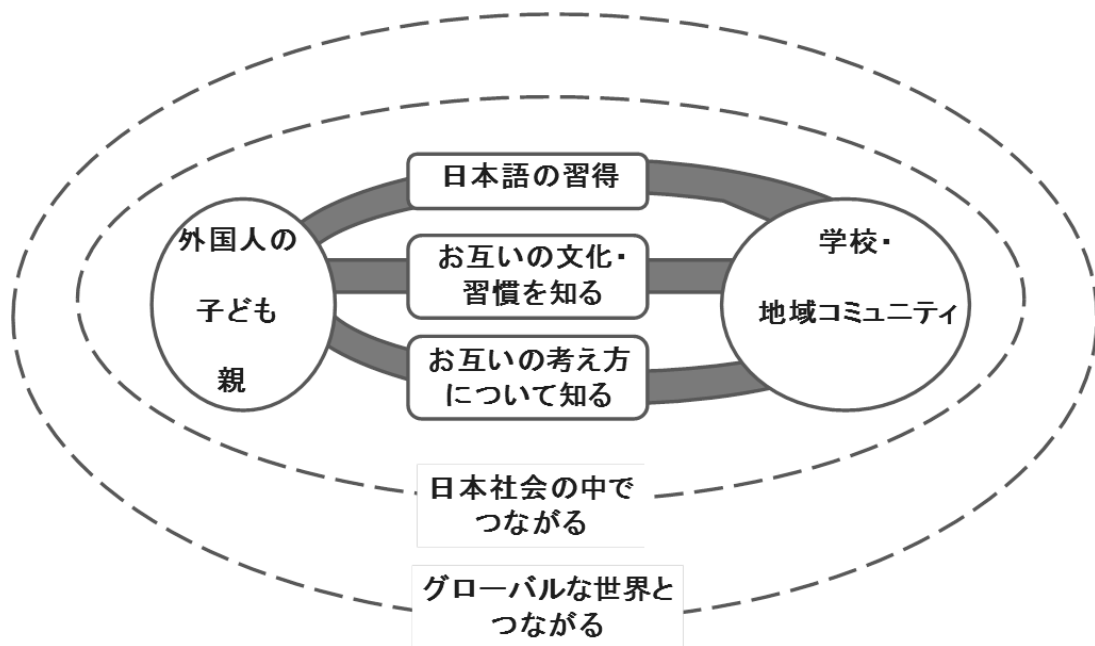
地域の教育委員会、学校、行政、地域住民、NPO等との連携・ネットワークの作り方の理解

関係ゼロの状態から教育委員会、学校との信頼関係を作り、そして地域の大学、企業、住民も含めたネットワークをどう作っていくか。

第6章の構成

- 6. 1 ネットワーク作り(1)
 - 6. 2 ネットワーク作り(2)
 - 6. 3 ネットワーク作り(3)
 - 6. 4 ネットワーク作り(4)
 - 6. 5 ネットワーク作り(5)
 - 6. 6 触れあえる時間の長さの同心円
 - 6. 7 触れあえる心の近さの同心円
 - 6. 8 教育委員会・校長先生との信頼関係構築
-

6.1 ネットワーク作り(1) 違うもの同士がつながることや変わることを後押し



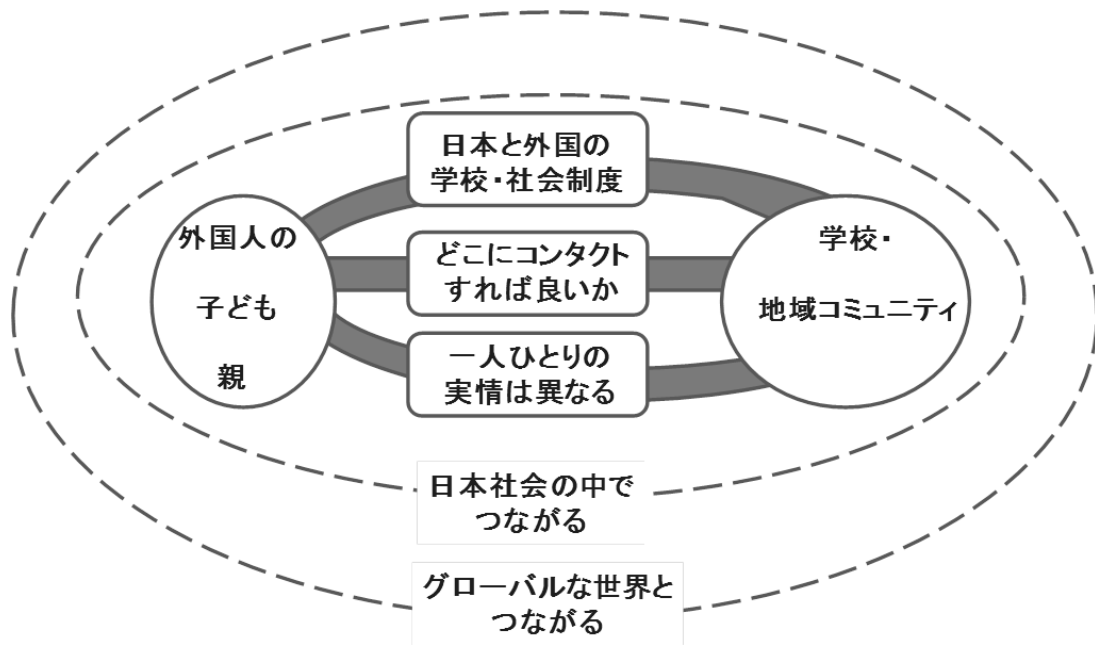
日本に住み日本でこれからも生きて行く外国につながる子どもの支援は、様々な人たちが様々な組織の協働で成り立つ。この協働はその時その時の単発的な協働よりも、その子どもの人生に沿って関わるネットワークとしてつながっている協働であることが望ましい。例を、子どもにとって近い存在である学校・地域コミュニティとの関係で見てみる。

子どもが日本に住み生きて行くために日本語の習得が必要であり、その日本語はお互いの理解のために役立つものである。役立つ前提として、文化の違うもの同士の場合、お互いの文化・習慣を知ること、その日本語がお互いの理解のために生きてくる。

さらには、物事に対し働き掛ける場合の考え方も違っていることが多く、お互いの考え方がどう違うかを知ること、日本語がお互いの理解のためにさらに生きてくる。ネットワーク作りにおいては、まずお互いに何が違うかの気付きを持てるように後押しをすることが出発点となる。

例えば、学校の先生が日本の学校生活やルールについて一所懸命に外国人の保護者に説明している場合、日本の学校のことを知らない保護者は自国のそれを思い浮かべて話を聞いている。そこに理解のギャップが生ずる。先生が保護者の国の学校生活やルールが日本のそれとどう違うかを少しだけでも知っていると、保護者にとって説明がわかりやすくなり理解が進む。

6. 2 ネットワーク作り(2) 情報提供により自律を後押し ～ お互いに相手を知ることができるように ～

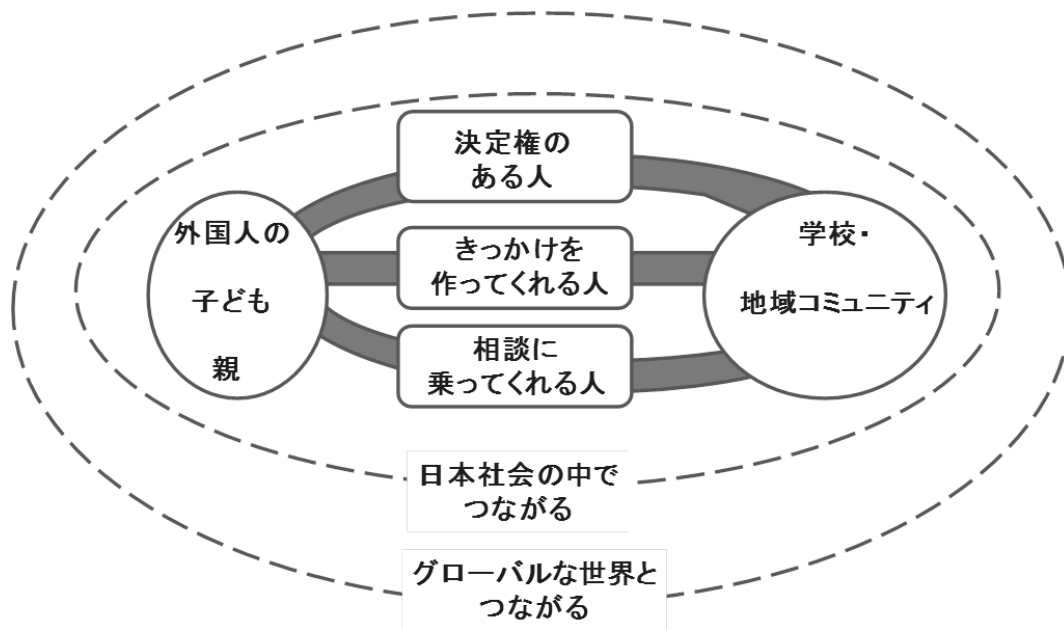


日本の学校制度や学校生活の知識が不足している保護者に、どのように情報が提供されるとお互いの理解に有効だろうか。

情報提供のひとつのあり方は、双方の国の学校制度や学校生活のことを併記して提供することである。日本のことだけが書かれた情報の場合、日本の知識が不足している保護者は自国のそれを思い浮かべて理解しようとする。しかし、そもそも日本にはあるけれど保護者の国にはないものであったり、用語は類似でも内容が異なるものについては、保護者は誤解をしやすい。併記されていれば、自国にはないものなのか、また、用語が類似でも自国のものと内容が違うということがすぐわかる。そのことを知った上で保護者が先生の話の話を聞くと理解が進む。また、逆に先生の方も保護者の国の学校制度や学校生活が日本とどう違うかを少しだけでも知っていれば、そこがお互いの理解の糸口となる。

また、外国人の保護者が多くの場合困るのは、どこにコンタクトすれば良いかがわからないことである。学校の先生なのか、バイリンガルの指導助手か、学校の事務室か、市役所なのか、近くの知人なのか。日本ではママ友の間で情報のすきまを埋めることができているが、外国人の保護者の場合、日本の細かいことを知らないのとまどうことが多い。学校からの情報提供の場合、コンタクト先が明示されているととまどうことが少なくできる。

6.3 ネットワーク作り(3) キーになる関係者を見つけて、つなげる



支援者が、外国につながりのある子どもや親を支援する場合、関係する組織に必要な支援を得るべくアプローチすることになる。その際、関係する組織の中で、支援案件について決定権を持っている人が誰なのかを把握しておくことが重要である。また、対応してくれる窓口の人と日頃から良い関係を作っておくと、特に急ぎや複雑な問題の時に大変助かる。

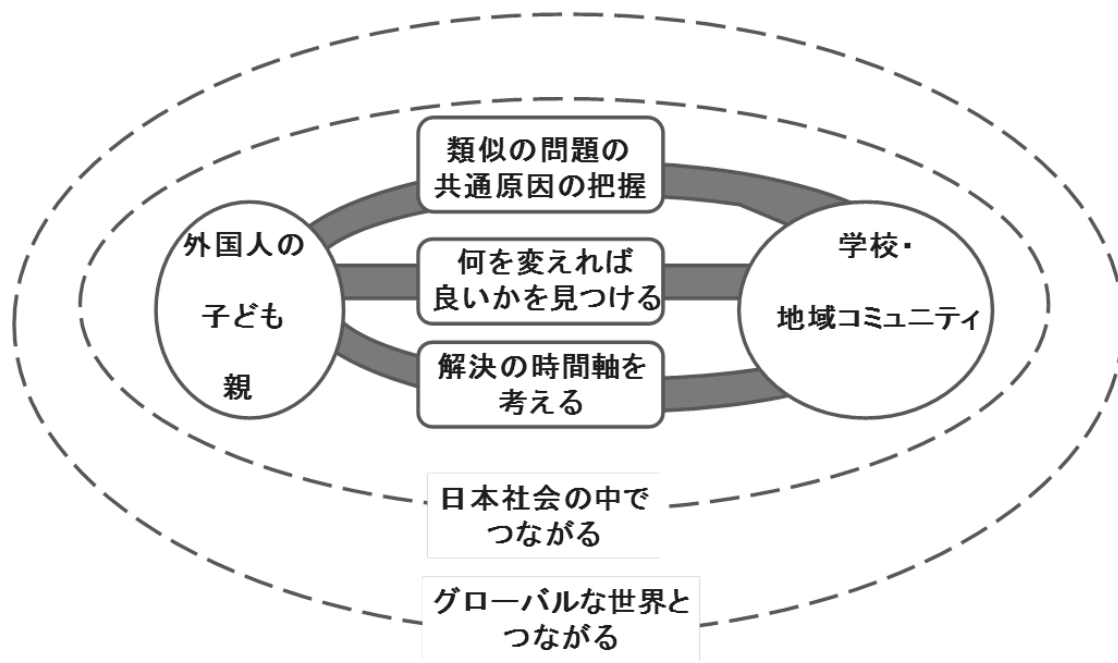
「良い関係」とは、お互いに信頼できる関係のことである。信頼は、日頃の細かい積み重ねで少しずつ築かれる。相手の立場や忙しさに思いを馳せ、約束を守る、時間を守る、進捗の報告をする、対処してもらった時はお礼を伝える、など、細かいことの配慮が大事である。細かいこともきちんとできない者が大きなことを言っても信用されにくい。

逆に、積み重ねた信頼は、ひとつのミスで崩れる。その修復には何倍もの時間がかかる。

また、対象の組織に何かのお願いをする場合は、口頭だけではなく紙資料でお願いをする。窓口の人からその組織内に諮る際、当方の考えが伝わりやすい。紙資料は、相手の言葉、相手の価値観で書く。そうすることで、相手は自組織としての判断がしやすくなり、また相手の立場を織り込む当方のアプローチに信頼感を持ってもらえる。

6. 4 ネットワーク作り(4)

個別の問題を深掘りして、基本問題を見つける



支援者が外国につながりのある子ども・親の抱えた問題の解決を支援する場合、その問題の「深掘り」をすることが解決策を考える上で重要である。

現象として現れた問題は、個別の経緯から生じており、その親子固有の問題の部分が多く含まれている。個別の部分の対策をする一方で、類似の他の問題との根っこにある共通の原因を把握するようにする。これが「深掘り」である。

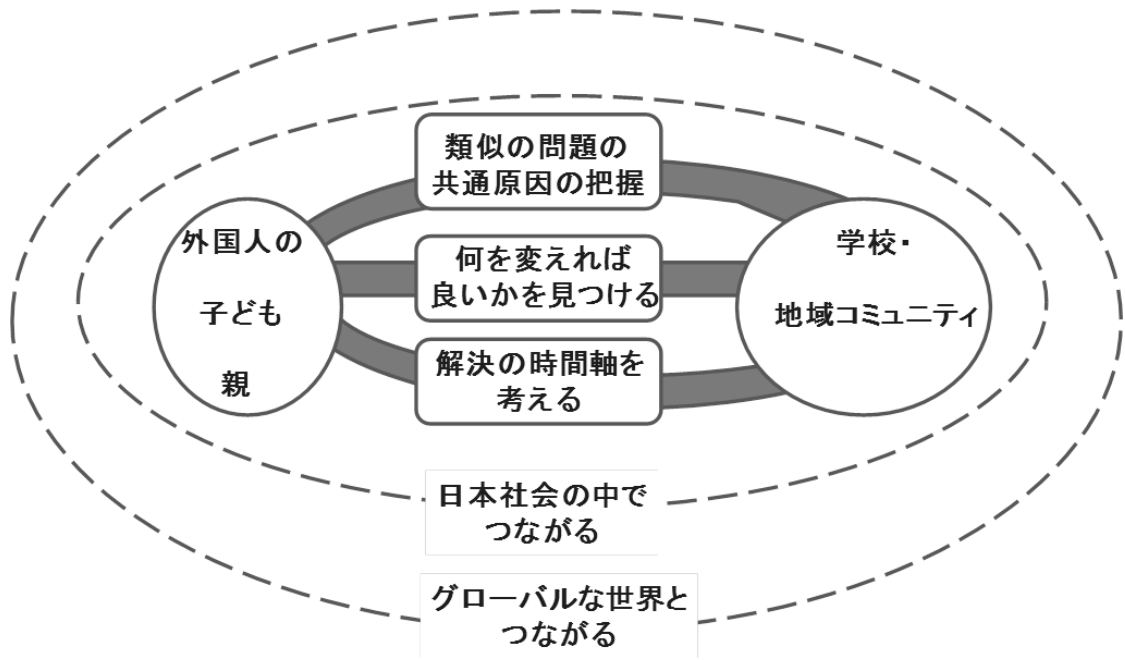
根っこにあるこの共通の原因を把握できれば、その親子の固有の問題を対策しつつ、その再発を予防するための対策をできるだけ一緒に織り込むことで、表面だけではない解決を図ることができる。根っこにある共通の原因の周知を行えば、類似の問題の発生を予防できることになる。

根っこにある共通原因の解決は簡単ではない場合の方が多い。時間もかかるし、より多くの関係者の理解と協働が必要になる。すぐ解決ができなくとも、この共通原因を知っておけば、別の親子に個別問題が発生した場合も、よりの確にかつスピーディに対処できる。

具体例としては、各国の教育制度の違い、学齢主義の制度における過年齢の制限、下学年編入、日本の制度の保護者の知識不足、などである。

6. 5 ネットワーク作り(5)

各分野の組織の問題を深掘りして、基本問題を見つける

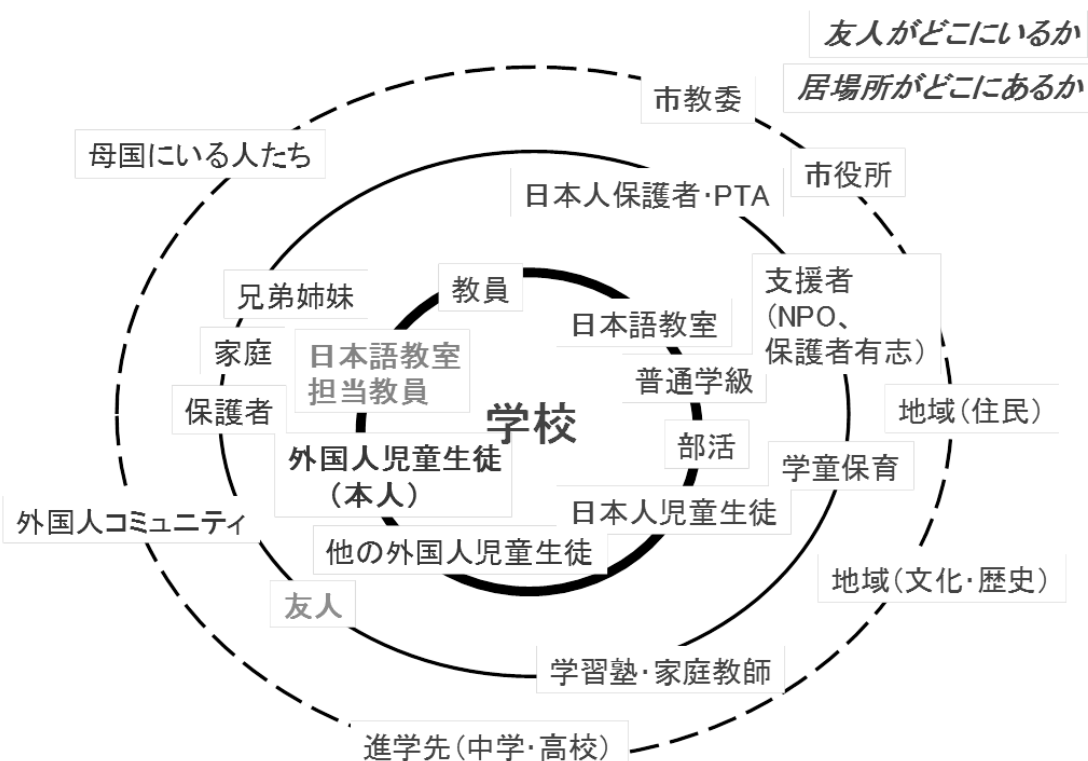


支援者が外国につながりのある親子の問題の支援などをする場合、いくつかの関係組織との協働が必要になる。具体的には対象の組織の人と協働するわけであるが、組織の対応には自ずと限界があるのが現実である。

支援対象の問題案件について、対象組織の対応の限界がある場合、その限界との折り合いをつけたり、別のルートをたどるなどの表面上の対処の動きをする一方、その組織の対応の限界がどういう原因で来ているのかを把握するようにする。類似の問題の根っこの共通原因を探ることで限界の原因も見えて来る。

限界の根っこの原因を把握することで、状況によっては対象組織の人といっしょにその原因を部分的にせよ改善することができるかもしれない。そのチャレンジは、その時は達成できなくとも次につながる。機会ある毎に一步一步改善の糸口を作りながら時間はかかっても進めておく。

6.6 触れあえる時間の長さの同心円

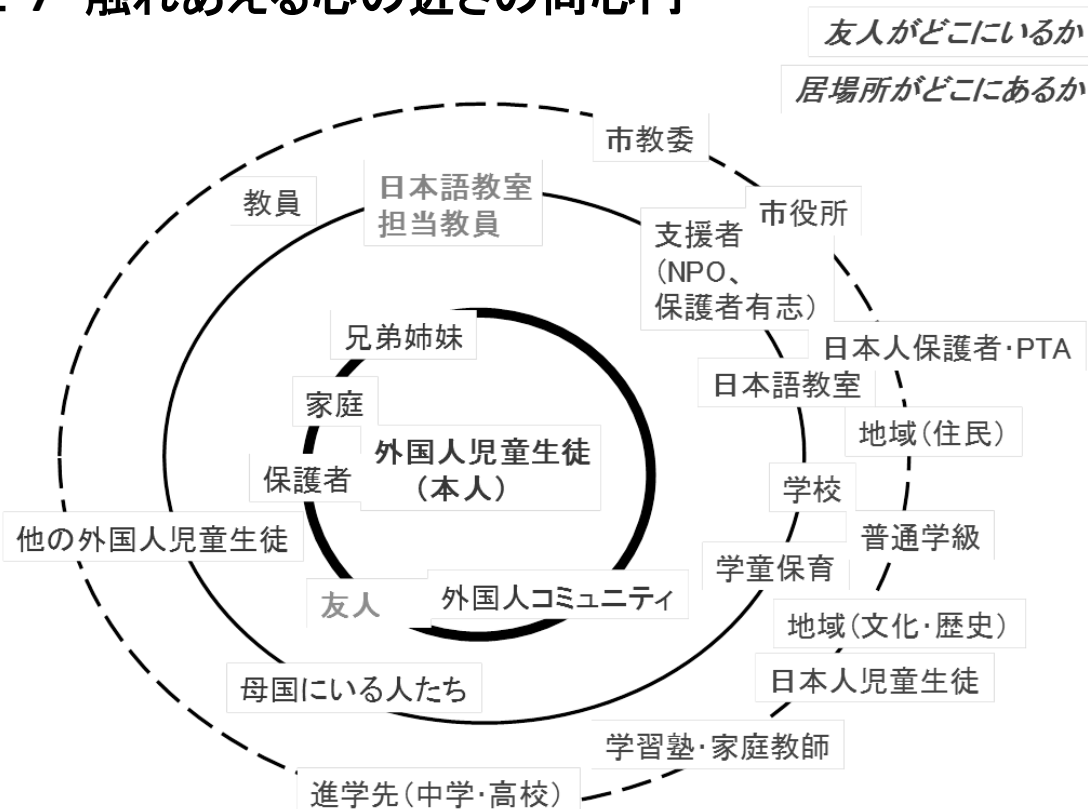


子どもが長い時間を過ごす学校を起点に、外国につながりのある子どもの周りの人々とその子どもの触れあう時間の長さを考える。その子どもにとって、学校における良い事も良くない事も、触れあう時間の長い人ほど、その事についてその子どもにアプローチしたり影響を与えたりすることができる立場にある。

触れあう時間を特に長く持てるのは、日本語教室担当の先生や他の外国人児童生徒であろう。この長い時間を1年間を通してどのように行使するのか、考えておく価値がある。日本語教室担当の先生は直接のアプローチになるし、他の外国人児童生徒との触れ合いについてはその触れ合いを意識的に意味あるものにする環境を作るアプローチになる。

特に、学校における友だちの存在は、日本語が十分ではない子どもの場合、大変大切である。具体的事例としては、中学生で日本語が初期レベルの子が、休まずに通学できた。一緒に通える友だちがいたからである。また、日本語ゼロで学校に入った子も、友だちができやすい子は、学校になじみやすい。特に友だちの中に日本人がいると、結果的に日本語の発達にも良い影響がある。部活などで、友だちができやすい環境を作ることも有効である。

6.7 触れあえる心の近さの同心円



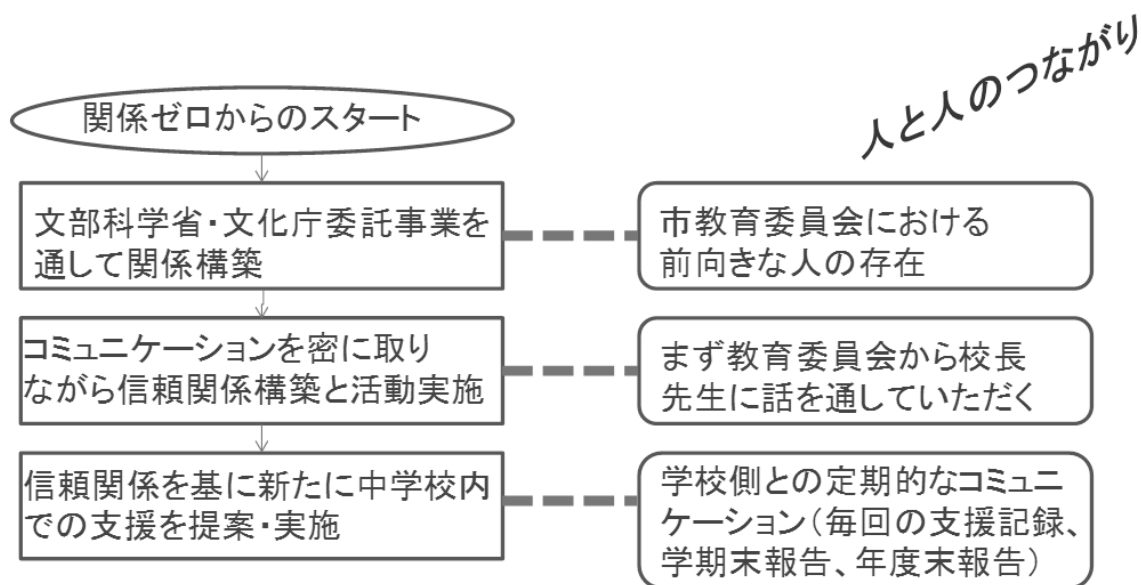
外国につながるのある子どもを中心に、周りの人々とその子どもの触れあえる心の近さを考える。触れあえる心が近いのはなんといっても家族であろうし、友人である。

否応なしに自分を外国人と意識せざるを得ない日本での環境の中で、外国につながるのある子どもは自分をどう位置付けているのだろうか。多分どこか受け入れられ難さをいつも感じている日本社会の中で、家族や友人はお互いに守り合う存在だろうと思う。その中で支援者は、河の向こう岸にいる守り合う人なのであろう。子どもから見ると、支援者が親も含めた形での支援である場合、支援者に対する「守り合う」感覚は増すと思われる。

家族や友人との心のつながりのあり様にも文化的な違いがあるはずであるが、支援者からはそこまではなかなか見えない。日本人の支援者は、日本の文化の目で家族や友人とのつながり方を理解するが、子どもや親の自国の心のつながり方の文化を知りたいところである。

多分友だちの作り方の文化の違いは、比較的に見えやすい。例えば、ブラジルは多民族国家であり、学校教育でも多様性を認め合う教育をしていると聞く。友だちの作り方も自分から積極的にアプローチするやり方であり、それは日本人生徒から見ると違和感を覚えるかもしれない。ただ、事前にそれがブラジル式であると知れば、肯定的に捉えるであろう。違いを事前に知るようにすることが多様性の理解には必要である。

6. 8 教育委員会・校長先生との信頼関係構築



教育委員会・校長先生との信頼関係作りも小さな信頼を蓄積していくことでなされる。

また、一方で、国や県の委託事業の中で関わりを持つことは、支援者としての信頼を得るきっかけになり得る。

きっかけを得て関係が始まれば、約束を守る、時間を守るという小さな信頼の基本をきちんと行う一方、活動をガラス張りにすることでの信頼も構築する。

教育委員会との信頼関係があれば、学校との新たな支援の取り組みを円滑に始めやすい。校長先生に入ってもらうことも大切である。それらにより、支援が仕組みとして行なわれることとなり、現場の先生との協働も行ないやすくなる。

仕組みの中での信頼関係が構築出来れば、その実績を踏まえさらに新たな活動やつながり作りに進むことができる。

教育委員会・学校は定期的な人事異動があるので、仕組みとして支援活動ができるようになっていることで、関係の継続性も確保されやすい。教育は長いスパンで行われるものであるから、仕組みによる継続性の確保は重要である。